

弘前学院聖愛高等学校

住所 弘前市原ヶ平字山元一一二の二一

生徒数 一二二五名

部員数 二五名

顧問名 土岐 司

思えば、我が校の空手道部の原形は一九六三年に四人の生徒が空手をしたという願いを申し出てからであった。当時としては映画等でしか空手を見ることのできない時代であり、しかも劇中では悪役がその勢力を誇示する場面で見られない極めてマイナーな武術でしかなかった。ましてや、女子が空手をするなどは言語道断の気風が依然としてあった時だけに、体育館の一部や地下の空間を利用して練習をしたものであった。また、現在のよう運動具店に行けば手軽に空手衣が手に入るでもなしで悪戦苦闘で生徒たちを励ます毎日であった。

学校はと言えば、高体連競技種目でもない「空手」は「場所ふさぎ」であり、他の種目の練習の邪魔者でしかなかった。しかし「文化祭で演武をしよう」を旗印にして、少数ではあったが熱心な練習が連日続いた。その活動に呼応するように東奥義塾高等学校にも同好の士が現われて、合同練習の毎日が続いたのである。現在のようにVTRでもって学ぶことなど予期すらできない時代だけに、指導者の技術の伝達と熱心な生徒たちの情熱でしか指導できないものであったが、両校とも文化祭で見事な演武を披露できた事は、取り組んだ生徒たちには最大の喜びとなった。ともす

れば「空手をする者はガサツだ、」とか「何をするかわからない」等と危険視される傾向を打開するためにも「挨拶の徹底、返事の徹底、血気の勇を戒むべし」が指導の最大力点になっていた。まだまだ「武道空手」としてのイメージが強い時代に合宿の行き帰りの道では、バンカラな男女が下駄を鳴らして歩いている姿は奇異なものとして市民には映っていたことであろう。

一九八二年我が校が始めて高体連に選手を送り出したのは、当時の三代目主将対馬貴子であった。対馬は型の選手としては幼少時代から父の道場で鍛えられただけに卓越した技量であった。それ以後は、競技としての「空手」の研究に走り、ともすれば「武道空手とスポーツ空手」の狭間で苦しい時代を体験することになったが、一九八四年高校総体では見事に「団体優勝」の栄冠を射止め、神戸で開催された全国大会の青森県代表となることが出来た。その翌年からは六代目主将葛西祐子を軸に全国大会（水戸市）、東北ミニ国体、全国選抜大会と連続して全国レベルの大会に出場することができた。当時の青森県のレベルはまだまだ全国に通用するものではなかったものの、特出の選手の輩出は青森県の力量を示すに足るに十分なものであった。我が校の葛西祐子は「雲手」を青森県高校女子選手としては、最初に演武した選手として記憶に留めたいものである。

さらに、一九八七年には八代目主将土岐 歩の活躍が光った。土岐は、小兵ながら持前の強気で県大会では第二位にあまじたものの、東北大会では見事逆転の優勝をして面目を躍如し、二年で全国大会（群馬県）、三年で全国大会（札幌市）とさらにミニ

国体、全国選抜大会と駒を進める快挙をなしとげた。

次いで、一九八八年十代目主将尾崎孝子以下は、昭和六二年の秋季大会を制し、東北大会から全国選抜大会出場を果たした。さらに翌年昭和六三年の春季大会を制し高校総体の団体準優勝は、我が校の念願であった「明朗旗」獲得の先鋒として勝ち名乗りをあげることができた事は記憶に鮮明に残るものであった。この「明朗旗」は制定されて以来県立青森西高等学校から一度たりとも移動したことがない歴史を持っているだけに祝勝会の喜びは一入であった。



一九八九年十一代目主将工藤 静は前年度の秋季大会を団体戦を準優勝で勝ち進み、東北選抜大会では見事に優勝。全国選抜大会に駒を進め、県総体に期待をたくして臨んだものの団体第二位に甘んじるといふ結果で終わっている。しかし、工藤の敏捷な体から出される躊躇を知らない技は東北大会で大きく裂し優勝を手中にしている。

現在一九九二年、第十四代目主将松原美由子は、福島で育った空手界のサラブ

レットであり日本空手協会全国少年大会の常連であり、二年の秋季大会個人型を第二位で抜け、選抜東北大会では見事に劇的な逆転優勝をしてくれた。現在三年の松原は春季大会の個人型を制し、団体組手第三位に導く原動力として努めたが総体団体組手三位に肩を落としたものの、松原の精神力は見事に「個人型優勝」の栄冠を手にし、いま東北大会・全国をめざし準備を進めている。さらに総体での個人組手第四位についた三浦香織の努力の結晶を評価したい。

総括的記述をしたが、改めて積み上げてきた歴史が彷彿としてくる。時代の流れの中で、全国的組織の再編成、審判規定の改変、オリンピック種目への参入、用具の変遷、に加えて大会回数の増加等々スポーツ空手としての立場が確立されつつある中で、教育的配慮が忘れおかれる事態は現場の指導者の一人として極力回避したいものだと痛感している。殊に、大会における審判は自他共に神経を使うものであるが、連日の努力を発揮する生徒たちの評価の場であるだけに襟を正して審判にあたりたいものである。

また、指導者の不足は青森県のスポーツ空手の振興には決定的マイナスファクターとなるものであろう。従って、県出身者の空手マンの社会的受け入れ皿が求められてはいないであろうか。今後の課題として受け止めて戴ければ幸いである。二十周年の記念の年を迎えるにあたり、組織作りから現在に至るまでの関係者の永い戦いを讃え、今後の益々の発展を祈念したい。